

ケースで学ぶ 良い・悪い状況を見極めるための財務分析

①～⑤：山根孝一（中小企業診断士
資金繰りコンサルタント）
⑥・⑦：藤田祐紀（高野総合コンサルティング
公認会計士）

ここでは、財務状況を見極めるための分析・確認方法を解説します。

〈貸借対照表〉

① 前期に比べ現預金が増えている

A社の現預金 (単位：百万円)

前々期	前期	当期
100	120	150

現 預金は人間の体にたとえ「血液」にあたる大切なものです。決算期末に現預金が増えていけば、たくさんのお金があるという事です。しかし、基本的には良いことです。しかし、やみくもに増えればよいわけではありませぬ。極端な例として、商品や材料を仕入れずにいれば現預金は増えますが、在庫がなくなると売上をあげられなくなります。そのため、なぜ現預金が増えたのか原因を探り、財務状況を正しく判断することが重要です。

財務状況が良いケース



一番単純な良いケースとしては、現預金以外の流動資産（受取手形や売掛金など）が減って、その分だけ現預金が増えている状態が考えられます。

受取手形や売掛金は売上債権と呼ばれ、売上が実際に入金（回収）されるまでの間計上される勘定科目です。売上債権が減って現預金が増えた場合は、それだけ回収が進んだということ（図表1）。

1。場合によっては、大口の受取手形が支払期日になり入金された可能性もあります。いずれにしても、その会社の業績に対しては特に良い悪いはなさそうです。

最も良いケースは、会社の事業全体が拡大している状態です。この場合は、現預金に限らず、多くの勘定科目で数字が増加することになります。

例えば、売上を増やすために仕入を増やしたことで買掛金や支払手形が増えているかもしれません。

図表1 減少する売掛金の例 (単位：百万円)

	前々期	前期	当期
現預金	100	120	150
売掛金	80	60	30
受取手形	50	50	50
棚卸資産	100	100	100
仮払金	5	5	5

一方で、売上の増加により、現預金の増加だけでなく、売掛金や受取手形の増加という形で現れることがあります。業務量が多くなっていれば、それだけ人件費も増えます。場合によっては、増加運転資金や代金回収までのつなぎ資金の融資など借入金も増加していることもあります。

貸借対照表上、このような状況が見られる場合は、損益計算書の売上高や利益が増加している可能性が高いです。

資産と負債の連動も確認

貸借対照表の資産の部（左側：借方）のうち、現預金が大幅に増えていて、他の勘定科目では数字があまり変動していないと、左側の合計は増加します。貸借対照表の左右は必ず一致することから、負債・純資産の部（右側：貸方）のどの勘定科目が大幅に増えているか確認することが重要です。

例えば、現預金の増加と買掛金の増加（図表2）が対応していれば、支払条件の緩和が考えられます。

図表2 増加する買掛金の例 (単位：百万円)

	前々期	前期	当期
買掛金	90	110	140
支払手形	60	60	60
流動負債	150	170	200

図表3 減少する固定資産の例 (単位：百万円)

	前々期	前期	当期
建物・車両	100	98	97
機械・装置	60	39	8
工具・備品	30	29	28
土地	500	500	500
固定資産	690	666	633

現預金が大幅に増加していても好ましくないケースがあります。例えば、減価償却費以上に固定資産が減少するケースです（直接控除方式を採用している場合）。

財務状況が悪いケース



商取引においては、優良な顧客になると様々な特典を提供してもらえることが少なくありません。優良顧客の特典として支払サイクルが1ヵ月延長されている場合は、その間自由になるキャッシュ（現預金）が増えるため、資金繰りに余裕が生まれます。

3) は固定資産の売却などの可能性が考えられます。

使っていない設備やゴルフ会員権などの遊休資産であれば事業活動に影響はありませんが、そうでない場合は影響が出る可能性があります。どんな固定資産を、なぜ売却したのか確認しましょう。

「固定資産の売却＝経営難」と考えるのは早計ですが、事業に使っていた設備などを売却していた場合は注意が必要です。売却の理由に合わせて、現状や今後の計画などを詳細にヒアリングすることも重要です。

小さなことも見逃さない

もう1つ好ましくないケースとして挙げられるのが粉飾です。粉飾とは、「決算書に実態が反映されていない状態」です。現預金で粉飾は難しいと思われるかもしれませんが、お金には名前が書いてあるわけではないため、ある程度であれば見落とされがちな手口といえます。

例えば実態が赤字であれば、売上だけでは費用をまかないきれないということ。売上で費用をカバーできないとすると、費用の支払いで資金不足に陥った場合にはどこから捻出する必要があります。そこで、普通は現預金を取り崩すことで対応します。

しかし、支払った費用を決算書に計上しなければ、それだけ赤字を隠すことができます。仕入費用や人件費、家賃などを支払わなかったことにすれば、黒字に見せかけることは可能です。適正に費用計上されないのですから、つじつまは合いません。そこで、貸借対照表上、現預金は水増しして計上されることになるのです。

金融機関の担当者としては、融資先の返済が滞っていないからといって放置してはいけません。小さなことも見逃さないようチェックする姿勢を持ち続けることが大切です。預金の推移はもちろんです、事業の状況をしっかりと確認して、決算書と実態の乖離がないか見極めましょう。